

山田雄三先生への追悼の辞

一橋大学名誉教授，日本学士院会員，元社会保障研究所長，山田雄三先生は平成 8 年 5 月 25 日，肺炎のため急逝されました。享年 93 歳でした。以下は，同年 5 月 28 日，宝仙寺での告別式における弔辞をそのまま収録したものです。

* * *

山田雄三先生の突然のご逝去に際し，私は先生のゼミナールに学んだものの一人として，また現在社会保障研究所をあずかるものとして，衷心痛惜に耐えず，先生の御霊前に謹んで哀悼の意を捧げます。

山田先生が一橋大学在職中 40 年にわたり，国民所得論，経済計画論，経済学史，社会科学方法論などの問題と取り組み，論理と実証と方法論を重視するきわめて個性的な学風をもって理論経済学の発展に貢献されたことはあまりにも著名であります。定年で大学を去られた後，先生は厚生省所管の特殊法人・社会保障研究所の初代所長となり，わが国における社会保障の基礎的，総合的研究を行う最初の，そして唯一の研究機関の運営に 8 年間にわたって尽力されました。その間，厚生省，総理府などの各種審議会，懇談会の会長および委員として厚生行政の方向づけにも，公正無私の立場から多大の貢献をされました。

先生は 90 歳を過ぎてもなお，明晰な思考と激しい情熱をもって研究活動を続け，次々と著作を発表し，学界に対して重い意味をもつ問題提起をしてこられました。先生の問題意識は，経済学は一方で，政治的，党派的イデオロギーの中に埋没することなく，科学的性格を維持しなければならないが，他方で，経済学は抽象的，非現実的な理論を脱して，利害対立を含む現実の政策や制度の調整と取り組むものでなければならないというものでありました。したがって経済学は政策研究として構築されなければならないが，それがいかにして科学的に可能であるかということが，先生の基本的な関心事でありま

した。

先生はこの問題意識を具体的に、経済計画および社会保障制度の策定にそくして展開されました。昭和35年に脚光を浴びて登場した「国民所得倍增計画」の策定に当っては、先生は経済審議会・所得倍增計画部会長を務められ、『国民所得の計画理論』という先生の博士論文において展開された視点から計画の基礎づけを図られました。また初代の社会保障研究所長として、先生は創成期にあったわが国の社会保障研究をみずからリードし、単なる制度の記述やイデオロギーの表明ではない学問としての社会保障研究の確立に全力を傾けられました。先生は福祉を福祉として絶対のものとして要求する立場や、経済や財政だけを重視して福祉の要求を顧みない立場を、ともにファナティシズムと呼び、経済と福祉の両者を連繫させて考えなければ問題の解決はないという観点を取ってこられました。これは社会科学の問題を、利害対立を含む多元的価値の相互批判的調整と見る哲学的考察に根ざしたものであります。今日、世界的に見て、社会保障と経済成長との整合化を図ることが政治の緊急の課題となっていることを考えると、先生の主張された社会保障研究のあり方はますます重要なものとなるでしょう。

山田先生が初代所長としてその運営に努力され、今日まで発展を遂げてきた社会保障研究所は、これまでたびたび行政改革の対象として取り上げられ、その存在が危機に曝されてきましたが、とうとう本年11月に廃止されることになりました。先生はこのような事態に強く反発され、心を痛めておられました。社会保障研究所30年の歴史が終り、山田先生も世を去られ、私どもは暗澹たる気持ちに包まれています。しかし、人間の心の中に共感をもって抱かれた思想は不滅です。私たちは先生の思想を新しい環境の中で最大限に具現するよう努力するつもりです。どうぞこれまでのように、ともに学問を追究する研究者として私たちを見守って下さい。先生のご冥福を心からお祈りいたします。

塩野谷 祐 一

(しおのや・ゆういち 社会保障研究所長)